

日本基督教団  
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規

# 教 会 報

188号2018年7月29日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

## 巻頭言

### 「常に喜びであるお方」

——フィリピの信徒への手紙第4章4~5節——

牧師 渡邊 義彦



主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。（新共同訳聖書）

二人の婦人の間に争いがあつたことが、この文脈の背景にあります。夫人の名は、一人がエボディアと言ひ、今一人がシンティケと呼ばれています。二人の女性の間にはどのような争いが起つてしまつていたのか。わたしは、あの先生から洗礼を受けた、いや、わたしは、あの大先生から洗礼を受けている、あの先生よりこの先生のほうがすぐれている、すばらしい、そういった自慢の言い合ひでしょうか。あなたの礼拝態度はまちがっている、あなたの祈りはなっていない、あなたの証しはあれはなんだ、そういった裁き合ひでしょうか。あなたの書いたあのものは気に入らない、ここを書き直せといった指導でしょうか。道徳的に、倫理的に、生活態度として厳格で正しい者が、道徳的に乱れていて倫理的にふしだらで、生活態度もでたらめな者を糾弾するような争ひでしょうか。逆に生活が乱れていることに開き直つた者が、まじめに懸命に生きている者を、揶揄し貶めようとする罵声でしょうか。あなたの奉仕よりも、わたしの奉仕の方が役に立っている、わたしの奉仕能力のほうが優れているという比較の争ひでしょうか。わたしたちに残り続けている悪意、わ

た私たちの内になお潜んでいて性懲りもなく負つてしまつている人間の欠陥を正直に思うとき、この二人の婦人の間に起つてしまつている争ひの原因をもっとたくさん挙げることができるでしょう。

ここでは、エボディア、シンティケという実名が挙げられていますから、空想の上の、思弁的な、抽象的な、一般的な問題が語られているのではなくて、実に具体的な、生々しい問題が起つていたのでしょう。パウロの手紙では、このように個人名を挙げて勧めをすることは珍しいことです。手紙の始まりにしる、終わりにしる、挨拶に個人の名前が挙げられることはたくさんあります。また、ピレモンや、テモテ、テトスといった個人に宛てて送られた手紙では、名前が呼ばれて、まるでその人のかたわらで語りかけるように教え諭すという文体に出会うことができます。しかし、教会に宛てた手紙で、ローマ教会に宛てたものも、コリント教会に宛てたものも、ガラテヤ諸教会、エフェソ、コロサイ、テサロニケ、どの教会に宛てた手紙も、個人の名を挙げての勧めは珍しいのです。

あれだけ、たくさん問題を抱えていたことが手紙から知ることのできる、コリント教会に宛てた手紙であっても、そして、その問題を起こしている人が教会員全員にまったく明らかで周知のことであったとしても、そこで、パウロ

は、その人の名前を挙げることはしないのです。あれだけ怒り心頭で、教会が最初に宣べ伝えられた福音から逸れて行ってしまおうとしていることに厳しい叱責の言葉を伝えた、ガラテヤ教会に宛てられた手紙であってさえも、教会を混乱させている人が明らかに特定できる状況であっても、そこに個人名を挙げて非難することはしていません。

それだけに、ここにはパウロの溢れるような思いが記されているように読めるのです。パウロは、ここで丁寧に言葉を重ねています。「わたしはエボディアに勧めます。そして、わたしはシンティケに勧めます。」と記しています。

「わたしは、エボディアとシンティケに勧める」というように二人にまとめて勧めを語ろうとするのではなく、仲違いをしてしまっている二人の間に飛び込んで、顔と体をそれぞれに向けるようにして、「わたしはあなたに勧める」、「わたしはあなたに勧める」と言葉をそれぞれに丁寧に使って、彼女らに懇ろに語りかけようとしています。個人の名が挙げられて、しかも教会宛の手紙で、この勧めが述べられるほどに事は深刻だったということかもしれません。二人は、聖書の中では、ここだけに名前の挙げられている女性たちです。そして、彼女たちを中心として起っているフィリピ教会の問題もここに語られていることだけが唯一の情報です。エボディアとシンティケの確執の原因が何で、手紙が送られた時点でどうなっていたのかは十分にはわかりません。

パウロが個人名を挙げて勧めをなして、和解を執り成すというのは、他の手紙には見られないことであるにしても、しかし、ここにもパウロらしい問題解決のための、使徒の執り成しの祈りを見る思いがします。いつも、どんなに様々な課題や問題が起こっても、しかしパウロの言わんとする解決は、いつもひとつのことを望んで語られ、論されています。フィリピ教会でも、コリント教会でも、ガラテヤ教会でもそうなのです。そして代々の教会は、パウロが望み、いつも語り、論してきたひとつのことに聞いてき

ました。パウロは、二人に、こう告げてあげるのです。

「主において同じ思いを抱きなさい。」

そして、パウロは、彼女らと一緒に福音伝道のために戦ってきた兄弟姉妹たちに、この二人の婦人を支えてほしい、祈ってあげてほしいと執り成します。祈りの喜びと平安を、パウロはこのように告げます。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝をこめて祈りと願いを献げ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」

パウロの、この言葉に励まされるようにして、わたし自身も祈りを学んできたという思いがします。パウロは、ほんとうに祈りの真髄を知っていたのだと思わされるのです。そして祈りなくして、伝道の困難にも、教会建設の労苦にも耐えることはできなかったはずなのです。パウロは、祈りの中でほんとうの喜びである方を覚え続けさせられたがゆえ、困難の中で、行く手を見失い、喜びを見失ってしまっている人々に、ほんとうの喜びがあることを語る事ができたのでしょ。そしてまた、喜ぶよう励ます事ができたのでしょ。喜びの源であるお方、主の近さを、パウロもまた覚えているキリスト者だったのです。

「喜びなさい。主において喜びなさい。いつも喜びなさい。主はすぐ近くにおられます。」

### 集会出席統計（月平均人数）

	2018年	
	5月	6月
主日礼拝	84.8	94.3
聖書と祈り会	17.3	16.5
教会学校*	117.3	104.8
* 保護者、教師を含む		
(第1主日開催)	5月6日	6月3日
聖餐夕礼拝	9	11

## 「2018年伝道月間報告」

伝道委員会委員長 渡邊 のぶひろ 信大

「6月伝道月間」を始めて8年目になります。それ以前は、春と秋に2回行っていました。2010年、渡邊義彦牧師を主任牧師としてお迎えして、渡邊牧師のご提案で、6月を伝道月間とし、地域の方々、教会員の家族、知人の方に広く呼び掛けて6月、4回の主日をすべて「特別伝道礼拝」とされました。

今年も素晴らしい先生方をお招きして伝道月間を捧げることが出来ましたことを、主に感謝いたします。以下ご報告いたします。

### ◇第1主日（6月3日）渡邊牧師「神は生きておられます」（創世記第1章1節～第2章4節）

誰でも興味のある天地創造から聖書の解説をいただきました。

生きておられる神が何をなさったのか、そして何をしておられるのか、これから何をして下さるのか。聖書は、神は、人間の歴史に関わってくださる、日々の生活に関わってくださっている。歴史を振り返ってみると、危機や不安、悲しみや苦しみがなかった時代はありません。

聖書が教会の聖典として受け継がれてきたのは、ただ一つのことによります。それは、神は、世界を良いものとしておつくりになったという出発点です。（創世記1章31節）

私たちは、新約聖書に至って、主イエス・キリストの十字架を知ることになります。神のひとり子、キリストがこの世に残り続けている悲しみ、苦しみをその一切をぬぐい取るために、自ら十字架を負ってくださったことを知るのです。

キリストの十字架に、なお世界は良いものとして保たれていることを神が示してくださったこと、このことこそ、世界に告げ続けてきたのです。と、語っていただきました。

### ◇第2主日（6月10日）青山学院宗教部長大学宗教主任・大島力牧師「神との出会い」

#### （出エジプト記第2章23～3章15）モーゼの召命

叫び声が、明確に神様に向けられていない時でも、祈りの言葉として、神は聞いてくださる。出エジプトの出来事は、旧約聖書の中で最大の救いの出来事ですが、神の人々に対する応答からエジプト脱出の出来事が始まった。モーゼの痛みと苦しみを知っていた神様との出会いにより、エジプトから連れ出す使命を受けたが、モーゼは、何度も担うことを躊躇し抵抗しました。私にできるわけがないと考え、私は何者でしょう、と言うと、神は、私は必ずあなたと共にいる、このことこそ、わたしが、あなたを遣わすしるしである。そして「私はあるという者」だと言われた。これは、私がある、私はあなたと共にあるもの、あなたと共にいるものである、という意味です。神が私と共にいてくださる。そのことに、全幅の信頼をおいて、その主要者として立ったのがモーゼであった。アブラハム、イサク、ヤコブの一人ひとりを導いた神、その一人ひとりの人生に決定的に関わって、困難を共にし、回り道であっても見放さず、共に歩んでくださった神、そういう神を私たちも期待できる。私はいる、あなたと共に、と言ってくださる言葉を信じる事が出来る。と聖書は語っています。私たちにとっての神は、信仰をもって生きてきた人々が証した神であり、その人たちの人生を最後まで導き、生かしたイエス・キリストの神です。私はいる、あなたと共に。その約束を受けて、私たちは日々の生活を、またそれぞれ使命を果たしていきたい。と語っていただきました。

◇第3主日(6月17日)目黒原町教会・大塚啓子牧師「私を支えるもの」(イザヤ46章3～4・マタイ25章14～30)・タラントンのたとえ

神の国で神様の前に立った時にどういう言葉をかけてほしいですか、の問いに対して「忠実な僕よ、よくやった」と言ってほしい。これが自分自身を支えるみ言葉です。神様は、それぞれの力に応じて必要なものを与えられています。他人をうらやむよりも、無い物を求めるよりも、自分に与えられているものは何か、それを生かしているか。自分の出来ることはする、自分の出来る限りのことはする。与えられた務めに忠実でありたい。神様は、私たちに賜物を与え、人生を共に歩んでくださっています。神に見捨てられたと思うような時、神は見捨てるところか、私たちが背負って歩いてくださっていた。私が生まれた時から今まで、またこの先も神は、いつも私と共に歩いてくださるお方です。それは、いいときも、悪いときもです。どんな時も神はいつも私たちと共におり、歩けない時には担い人生を肩代わりして歩んでくださる。それが聖書の語る神様です。この神様がおられるから、私たちは安心して賜物を生かす生き方が出来ます。失敗したっていい、神様が共におられるから、何度でもチャレンジできます。神様から与えられた仕事、家庭、地域、また自分自身に与えられている賜物、健康であったり、得意なことであったり、神様から与えられたものに忠実であるか、感謝して賜物を生かして生きているか、問われています。そして、わたしたちが神様と共に、自分の人生を最後まで歩むとき、不器用な生き方であったとしても、神様は最後に「忠実な僕よ、よくやった」と、言葉をかけてくださいます。成果を出すことではなく、どれだけ忠実に生きたか。いま、私たちはそれぞれの人生の段階に居ますが、この私たちと共に神様がおられ、一緒に人生を歩いてくださっている、このことを覚え、賜物をいかしながら、最後まで与えられた人生をしっかりと歩んでいきた

い、そのように願います。と、力強く語っていただきました。

◇第4主日(6月24日)松下恭規牧師「主イエスの家族とは」(マタイ23章46～50)

「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」このみ言葉は、真の家庭、家族とは何か、教会とはどういうところか、とお教えくださっている重いみ言葉です。自分の基準に照らして生きようとしている人ではなく、主イエスによって、あらわされている父なる神様のみ旨を受け入れて生きる、主のお語りになるところに、自分たちも立つ。ひとり子をこの世に下したもうほかに、私たちが愛してくださっている。教会は、主に召し集められて礼拝を守り、み言葉と主の聖餐を守り続けている。神の愛に、へりくだることなしに私たちは、人々の愛、家族への愛を、本来ある姿にすることは出来ない。私の天の父のみ心を行う者が私の家族だ、と仰せくださる。ですから、距離を置くことをやめて、主の懐に飛び込んで、み言葉を聞き続ける者にならなければならない。具体的には、信仰告白をして洗礼を受けるという恵みに与かることである。洗礼を受けることによって、真の家族になることが出来る。誰でも私の天の父のみ心を行う人は、みな家族だ。天の父の心である主の十字架と、復活に感謝して、礼拝を守り、その感謝に生きる人が、私の兄弟姉妹、母である、と仰せくださっている。そして、天の父のみ心にかなった、主に従う家族になるために、神に向かって歩むこと、互いに祈り合い、励まし合い、導きあう、そういう者でありたい。と祈る者でありたいと思います。ここでの主のお言葉を、ぜひ心にとどめて、よく考えてみて頂きたい。そして、この世の中に、真の家族としての在り方、人間関係の正しい在り方を、主から学びたい、と思うのであります。伝道月間を閉めるにふさわしい家族の問題を、そして、ハウスではなく、ホームを築くこと、教会が最も真剣に取り組まなければならない問題が、このみ言葉に示されていることを、力強く、語っていただきました。

## ◇愛餐会

第2主日と第3主日の礼拝後、各先生を囲んで愛餐会が行われました。

大島力牧師との愛餐会（司会・石岡美典子姉）では、大学でのお働きや先生のご著書について、また、説教にあった聖句の「わたしはある」の訳の質問があり、今年の秋に出る共同訳では、「わたしはいる」になるかもしれない、また詩編23編の変更も興味深い、と分かり易く和やかにお話していただきました。

大塚啓子牧師との愛餐会（司会・川嶋章弘神学生）では、目黒原町教会で工夫なさって

いることは、子ども伝道集会、讃美歌の集い、ハンドベルコンサート、ミッションスクールの先生との子ども礼拝など。家族伝道には、先生のお子さまを例に、強制するものではないので自分で決めさせる、そして祈って待つ。と、にこやかに話され、信仰継承についての質問の中では、家族が信仰を持たない場合、自分がいざという時のために『まず、教会に連絡を』と家族に伝えておくことなど、身近な家族間の興味深いことを楽しく分かり易くお話していただきました。

## 「アジア学院研修生歓迎昼食会報告」

江島 香織

今年度、全国教会婦人会連合の世界教会運動委員会によるアジア学院研修生のホームステイプログラム支援は、6月2日（土）～4日（月）にかけて実施されました。

本年度研修生26名のうち、アフリカから留学されている、シエラレオネ下肢切断者スポーツ協会調整員であり牧師のマンブツさん、エリトリア農業省の農業改良普及員のベルハネさん、ガーナ草の根社会経済エンパワーメント女性グループリーダーのジョセフィンさん、この3名の研修生を平岡姉を中心として柿ノ木坂教会でお迎えしました。

6月3日主日礼拝後の新来者ご紹介では、皆さん流暢な日本語でご挨拶されてから、辻姉の通訳により志し高くアジア学院で学んでいらっしやるお一人お一人のご紹介があり、会堂内に感嘆の音が響きました。

礼拝に続いての歓迎昼食会は、井澤兄による食前の祈祷で始まりました。研修生お一人ずつを囲んだ各テーブルには、研修生の皆さんがお持ち下さったアジア学院で収穫された有機農法で生産された小麦粉や平飼い鶏卵を原材料とした那須塩原産？ビスケットや、平岡姉ご家族のお手製のローストビーフ等が並び、歓談しながら口々に、美味しい！美味しい！を連発、揃って楽しくいただきました。



江島さんの右がジョセフィンさん。江島さんの後ろにちょっとベルハネさんが写っています。（マンブツ牧師が撮影）

それから、アジア学院での年末までの研修期間中の課題、また帰国後の課題について、辻姉がお一人ずつインタビューされました。

その後、讃美歌21より井澤兄がセレクトされたタンザニア民謡をベースにした333番「主の復活ハレルヤ」、またアジア学院迎交流会でも讃美した560番「主イエスにおいては」等を、横井姉のピアノ伴奏で、共に讃美し、「主は我を愛す」を研修生の皆様の出身国ごとの言葉で順に披露し、共に讃美しました。

最後は渡邊牧師から日本語で、マンブツ牧師からは英語で、それぞれ感謝の祈祷と祝祷をいただき、昼食会はお開きとなりました。

ホームステイ自体も2泊3日と言うほんの短い期間ではありましたが、神の家の家族であるからこそ、与えていただけた生涯忘れることのできない一期一会に、多くの学び、気付き、そして感動をいただきました。

讚美歌 560 番「主イエスにおいては」には、今回のホームステイと昼食会を通して、与えられた溢れる恵みが表れているように思います。皆様もどうぞご一緒に…

イエスにおいては、世界の民、東と西とのへだてはない。

主イエスの救いは 力強く、南と北とを結び合わせ。

人を差別せず 心をひらき、ひとしくみ神のみ前に立とう。

主イエスにおいては 世界の民、心をかよわせ一つとなる。

In Christ There Is No East or West.

## 「アイオナ島（英国）を訪ねて」（2018年6月）

井澤 浩一

妻と次女と私の3人旅である。グラスゴーから3両編成の気動車に乗って約3時間、峠を越えて午後7時に海辺の町オーバンに着く。

ちょうど低気圧が通過中で、夜中は風雨。マル島に渡る船は天候次第とのこと。

翌朝7時前やや風は収まったが、雨は続く。フェリーターミナルに行くとなんとか定刻の7時30分には出航するという。大きな船なので恐れた揺れもなく、50分の船旅で、マル島のクレイグニューア到着。接続するバスも定刻出発。天気が悪いためか、乗ったお客は地元の人も含め、10人程度。

相変わらずの吹き降りの中、バスがやっと通れるくらいの狭い道、すれ違い用の場所が各所に設けられている道を、時々対向車を待ったりしながら走る。

頂きから幾筋もの滝が落ちる山々の間を登り、そして海岸に降る。最後は牧草地の台地を走り、マル島の西に長く伸びた半島を1時間10分かけて横断。地の果てのような海岸の小さな集落、フィナフォートに10時に着く。

ところがここからアイオナ島へはフェリーで10分なのだが、荒波が収まるまで出航見合せという。待合室で待つ羽目に。帰りの最終バスは15時20分発なので、気がもめる。

さて、どうしてこんな島に行こうと思ったのか説明しよう。

アイオナ島は大西洋に浮かぶ周囲5kmの小さな島。実はこの島はかつてスコットランドのキリスト教の中心地であったのだ。

ブリテン島へのキリスト教の伝来は、紀元前のローマの領土拡大を追って始まる。南から攻め入ったローマは北からの民族の侵入を防ぐため、現在のカーライルからニューキャッスルにかけて万里の長城＝ハドリアヌスの城壁を築いた。しかしローマの衰退と共に撤退するとアングロサクソンの侵攻によりキリスト教は衰退。一方アイルランド経由で入ったケルト系のキリスト教は、その波を受けず、563年に聖コロンバがアイオナ島に上陸し、アイオナ・アビーと呼ばれる修道院を開いた。

ここを拠点にスコットランドのキリスト教化を進めたため、初期のスコットランド王たちの墓もここにある。

しかし時代が下がると、南からのカトリックを受け入れるようになった。ところが宗教改革やイングランド国教会独立（いわゆる聖公会）を背景に、1560年の修道院解散令後、建物も廃墟と化した。

1938年になり、カルヴァンの流れを汲む

スコットランド国教会によって建物が再建され、新しく超教派のアイオナ共同体として再出発。ここからは、2003年の日本讃美歌学会での、吉祥寺教会・吉岡光人牧師の発表をお借りする。「古いものを再建し新しい息吹を吹き込むこと、これが教会のあり方として相応しいと考えられたから。現在、世界中から若者ら、多くの人たちが集まって礼拝を守っている。共同体の基本理念は、①毎日の祈りと聖書朗読、②時間と金銭的に相互に責任を負う、③正義・平和・被造物の統合に関心を持ち行動、などで、中世の修道院の理念「祈りかつ働き」を現代的に翻訳している。アイオナ共同体の讃美歌は伝統的なものに加え、現代的な若者にも合ったものである。」

私としては、その時配布された教団出版局発行の32曲を抜粋した日本語訳の「アイオナ共同体讃美歌集」が気になっていて、一度アイオナ島を訪れ、元の讃美歌集をぜひ手に入れたと思ったのだ。

・・・フェリーの待合室で待つこと3時間。なんと空は晴れ上がり、波は凧いでフェリーがやってくるようになった。ラッキー！

そして、10分の船旅でアイオナ島上陸が叶ったのである。時間が無くなり、世界遺産にもなっているアイオナ・アビーを中心に見学。

最後に教会のショップに行って讃美歌集は売っていないか尋ねた。ありました！ その折、担当の女性に日本で発行された抜粋の讃美歌集を見せ、中心になった作曲家ジョン・ベル牧師が来日されたことがきっかけで、出版につながった、という、えっ？とびっくり。仲間には是非見せたいと、私を伴って事務室に。みんなに、「日本で抜粋の讃美歌集が出ている！」と体中で喜びを表してくれた。

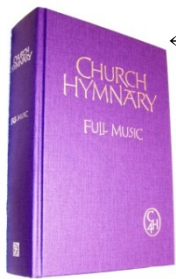
まばゆい晴天になったアイオナ島を離れ、15時20分発の最終バスで、往路とは一転、美しい緑に輝いている山道を、一路クレイグニューアに戻り、再びフェリーに揺られてオーバンに戻った旅であった。



アイオナ・アビー(世界遺産の修道院)



アイオナ・アビーの回廊



← 買い求めた共同体の讃美歌集



教団出版局編

アイオナ讃美歌抜粋版 ↑ ケルトの十字架 ↑



共同体の礼拝を行なうアビーの礼拝堂  
椅子の背に讃美歌と祈禱書が差してある

## 今月のメッセージ

——ホームページページ巻頭言——

このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。

(新共同訳聖書・マタイによる福音書第20章16節)

前評判の低かった国が大国を下したり、小さな国が決勝に絡んだり一喜一憂のひとつ月でした。

子供たちの成長を見ていると、特に幼稚園の頃から小学校3年生ぐらいまででしょうか、月齢がずいぶんと影響しているように思います。同じ学年、同じクラスに4月生まれの子もいれば、翌年の3月生まれの子もいます。学年は同じでも月齢では1年近くの違いがあるのです。赤ちゃんのときを考えてみると、4月に生まれた子が歩くか歩かないかというときに、3月生まれの子はやお母さんのお腹から出てくるのです。この差は大きいのです。

月齢差のある子供たちが同じクラスになるので違いがいつそう顕著になるのかもしれませんが、このように同時的に見渡すのではなくても、定点観測のようにして見ても、我が家の子供たちであれば、4月生まれの子と、2月生まれの子では同じ学年を迎えてもずいぶんと違うなと思わされました。もちろん本人たちの性格や性別の違いもあったでしょうが、しかし、同学年という通過点でずいぶん成長の違いを感じました。

ところが、この月齢差による違いは10歳ぐらいを境にだんだんなくなってしまいうように思えます。皆が肩を並べはじめます。小学1年生だったとき6年生はすごく大きく見えました。しかし今となっては、歳の差、月齢差などどこへやら、6歳年上も、年下も同世代で括られています。

スポーツや子供たちの成長だけでなく、わたしたちの日常には、後ろを走っていた者が、いつの間にか肩を並べて、そして、ついにはトップに立っているということにしばしば出くわします。先に引いた主イエスの言葉は、そのようなわたした

ホームページには多くの情報が掲載されています。

ぜひご覧ください

<http://kakinokizaka-church.com>

ちが日常出会うこともある成長モデル、逆転モデルのことを言っているかのようにも思われます。弱小チームがトップに躍り出たり、赤ちゃん、幼児みただった子がいつの間にか少年、少女になっていたりすることのように。

しかし、主イエスのこの言葉が、不思議なぶどう園の主人と雇われた労働者たちの話の結びとして言われていること、そして、この話が天の国の譬えであると語り出されていることを考えると、単純な逆転・成功モデルのことではないことに気付かされます(ぜひ、聖書を開いて、この箇所を読んでみてください)。

先の者も後の者も、だれもが等しく、ぶどう園で、主人から報酬をもらっています。もらう報酬は決して労働の対価とは言えません。多くもなく、少なくもなく、主人と約束したとおりの額を皆がもらいます。天の国とは労働の対価として勝ち取るのではないこと、我がちに手に入れようとも手に入るものではないことを、この譬えは語るうとしています。

小さな国のチームも、前評判の低かったチームもただ運だけでその順位にたどり着いたのではありません。そこには血の滲むような努力があり、成長があり、考え抜かれた戦略があったはずです。

しかし、どんな努力も、成長も、どれほど考え抜かれた戦略も勝ち取ることができないのが天の国です。なぜなら、天の国は、主なる神が支配なさることであって、わたしたちの努力や成長、戦略によって自由になるものではないからです。神は自由に、後の者にも、先の者にも、等しく恵みを与えます。神の御支配の内に生きることは最も幸いなことです。自由なことです。世が決して与えることのできない、神の不思議さ、恵み深さを聴きに、あなたもぜひ教会に来てみてください。

(牧師 渡邊 義彦)

### ——編集後記——

- ・伝道月間の礼拝は新しくお見えになった方々と共に守ることができ、愛餐会にも参加いただいた方もあり、嬉しいことでした。続けて教会にお出でになることを祈っています。
- ・毎年、教会員宅にホームステイされるアジア学院の外国からの方々をお招きしての昼食会について報告していただきました。主あって世界は一つ！を感じたひとつ時でした。
- ・「私の聖句、私の讚美歌」は都合により、次号に掲載します。お楽しみに。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。  
(編集委員長 井澤浩一)

### 集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分  
聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時  
入門講座 日曜日 午前9時30分  
教会学校 日曜日 午前9時  
(幼稚園科、小学科、ジュニアチャーチ)  
\*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。  
聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分  
日本基督教団 柿ノ木坂教会  
〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂 1-31-19  
電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)  
03-3723-3870 (バテル幼稚園)  
牧師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規